古文単語 現代語訳の誤りを直す ①

高校／印のついた訳を、本文に合う意味に直す

名前 _____

日付 _____

各問に原文と訳があり、訳の――線の部分は古語の意味の取り違えです（誤りはこの1か所だけ）。
その問の原文の中で古語の意味を決め、――線の部分の正しい訳を「正しい訳」の欄に書きなさい。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。（徒然草・第十九段）

訳　ものすごいものとして見る人もいない月が、寒々と澄んでいる二十日あまりの空は、心細く感じられるものだ。

正しい訳	原因

2 原文　花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひ出でらるる。（徒然草・第十九段）

訳　花橘は名で知られているが、やはり梅の美しい色つやによって、昔のことも立ち返って恋しく思い出される。

正しい訳	原因

3 原文　さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなむ。（徒然草・第七十六段）

訳　そうなる運命の理由があっても、法師は人と疎遠でいるのがよいだろう。

正しい訳	原因

4 原文　花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝心なく折り取りぬ。（徒然草・第百三十七段）

訳　花の下では、にじり寄ったり立ち寄ったりして、よそ見もせずに守って、酒を飲み、連歌をして、しまいには大きな枝を無分別に折り取ってしまう。

正しい訳	原因

5 原文　鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る数おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。（徒然草・第百三十七段）

訳　鳥部野、舟岡、避けられない野山にも、死者を送る数が多い日はあるが、送らない日はない。

正しい訳	原因

6 原文　あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。（徒然草・第百五十七段）

訳　あからさまに聖教の一句を見ると、なんとなく前後の文も目に入る。

正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ①【こたえ】

名前 _____

高校／印のついた訳を、本文に合う意味に直す　　日付 _____

赤い字がこたえ。「→」は手がかり。正しい訳は同じ意味の言い方なら正解にします（訳は自作）。

1　原文　すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。（徒然草・第十九段）

訳　ものすごいものとして見る人もいない月が、寒々と澄んでいる二十日あまりの空は、心細く感じられるものだ。

正しい訳	原因
興ざめな	**ア**

→ 見る人もいない冬の月の話。恐ろしさでなく「興ざめだ」の意

2　原文　花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひ出でらるる。（徒然草・第十九段）

訳　花橘は名で知られているが、やはり梅の美しい色つやによって、昔のことも立ち返って恋しく思い出される。

正しい訳	原因
香り	**イ**

→ 昔を思い出させるのは梅の「にほひ」＝香り。花橘と並べている

3　原文　さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなむ。（徒然草・第七十六段）

訳　そうなる運命の理由があっても、法師は人と疎遠でいるのがよいだろう。

正しい訳	原因
適当な（しかるべき）	**イ**

→ 「ゆゑ（理由）」を修飾して、ふさわしい理由という意味

4　原文　花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝心なく折り取りぬ。（徒然草・第百三十七段）

訳　花の下では、にじり寄ったり立ち寄ったりして、よそ見もせずに守って、酒を飲み、連歌をして、しまいには大きな枝を無分別に折り取ってしまう。

正しい訳	原因
見つめて	**ア**

→ 「あからめもせず（よそ見もせず）」と呼応して、花を見つめている

5　原文　鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る数おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。（徒然草・第百三十七段）

訳　鳥部野、舟岡、避けられない野山にも、死者を送る数が多い日はあるが、送らない日はない。

正しい訳	原因
それ以外の（ほかのも可）	**イ**

→ 鳥部野・舟岡と並べて、そのほかの野山と言っている

6　原文　あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。（徒然草・第百五十七段）

訳　あからさまに聖教の一句を見ると、なんとなく前後の文も目に入る。

正しい訳	原因
ほんの少し（ちょっとも可）	**ア**

→ 少し見ただけでも前後の文が目に入る、という流れ